



■フォトエッセイ■

チェルノブイリ・ツアーに参加して

写真・文 服部 倫卓
Michitaka Hattori

●念願のツアー参加

人類史上最悪の原子力事故であるチェルノブイリ原発事故が起きたのは、一九八六年四月二六日のことだった。当時はまだソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）が存在した時代で、原発はその構成共和国であるウクライナに所在していた。秘密主義だったソ連のこと、事故が国際社会に明らかになるのには数日を要したが、当時大学でロシア語を専攻していた私も大きなショックを受けた。原発事故は、一九九一年暮れにソ連が崩壊する序章になった。

その後、私は一九九八年から二〇〇一年にかけて、旧ソ連のベラルーシという国に駐在し、日本大使館で専門調査員を務めた。チェルノブイリ原発自体はウクライナに所在しているが、実は風向き等の関係で放射性物質の七割は北隣のベラルーシに降り注いだといわれており、ベラルーシこそ忌まわしき原発事故の最大の被害国なのである。大使館時代には、日本人の医師やボランティアがベラルーシの汚染地域で支援活動に従事する様子を目の当たりにした。

しかし、せっかくそのような知見を得ながら、私は原子力の問題について十分な問題意識を育むことができなかった。むしろ地球温暖化の方が喫緊の脅威であるように思われ、原発に関しては漠然と、それを緩和する必要悪のように捉えていた。そんな、あやふ



チェルノブイリの影の名物がこれ。冷戦の遺物、大陸間弾道ミサイル早期警戒巨大アンテナ。電力を大量に食うので、発電所の隣に建てられたらしいが、1986年の原発事故を受け運用が停止され、放置されて今日に至る

コバチという廃村にある幼稚園の廃墟。絵本や遊具などが散乱しているが、文中に記したとおり、どこまでガリアルでどこから「演出」なのかは、よく分からない。原発から至近の地なので、軒下などの線量はきわめて高かった



やな価値観を抱えながら、二〇一一年三月を迎え、大きな衝撃を受ける。原発について十分な知識や主体的な問題意識を持たないまま来てしまったという後悔の念と、焦燥感ばかりが募っていった。

そんな折り、仕事でウクライナに行った際に、現地の日本大使館員から、「チェルノブイリへのツアーが解禁になった」という話を聞き、強い関心を抱いた。大袈裟なようだが、チェルノブイリをこの目で見るのが、原発の問題にきちんと向き合っただけでなく、自分を悔い改める「みそぎ」のようなものと思われた。とはいえ、普段は仕事でウクライナに出かけるので、一日がかりのツアーに加わる時間はとれない。二〇一四年五月に個人旅行でウクライナを訪れ、その際によく念願のツアー参加を実現した。

一般人の見学が許可されるようになったとはいえ、「ゾーン」と呼ばれる汚染地帯への立ち入りは現在も厳重に規制されており、登録業者が組織するツアーに参加する必要がある。業者は複数あり、メニューも多少異なるようだが、私は「チェルノブイリ・ツアー」(<https://chernobyl-tour.com>)というところを選び、事前にメールで予約をしたうえでウクライナに赴いた。

●実際のツアーの様子

当日は、朝七時半に首都キエフの中央駅前に集合し、ミニバスでチェルノブイリに向かう。私が参加したグループは八名程度で、私以外全員、地元ウクライナの若者たちだった。参加費用は一三九米ドル。希望者には、放射線測定器のレンタルもある。



プリピャチ中心部の遊園地の跡地。打ち棄てられ錆び付いた観覧車は、チェルノブイリの象徴のようになっている。小型ながら、世界で最も有名な観覧車の一つかもしれない

チェルノブイリは、首都キエフから一〇〇キロあまりしか離れていないので、車で二時間も走れば現地に到着する。ドイツャトキというところにあるチェックポイントを通過して、立ち入り制限区域に入域。

まず我々は、事故で無人となったザレシエという廃村に立ち寄り、民家の廃墟を巡った。ちなみに、半壊した家の片隅には、おもちゃの人形などが放置されている光景があるが、その大半は見学者が写真撮影用の「演出」目



ここはスポーツのスタジアムだったという。20余年でグラウンドを林に変えてしまう植物の生命力に驚く

的で置いたものだという。
ザレシエを過ぎ、ツアー一行はキエフ州のチェルノブイリ市に入る。実はチェルノブイリ原発は同市にあるわけではなく、プリピャチ市の方が至近である。プリピャチが無入化して久しいのに対し、チェルノブイリでは今でも事故処理関係者など数百人が住んでいる。その後、我々は旧プリピャチの市街に赴き、所々で生い茂る草木をかきわけるようにして、ゴーストタウンを散策した。一九八六年の事故前までは、ソ連の未来をしょって立つ、輝ける科学都市だったプリピャチ。ソ連各地か



プリピャチ市で一番高い15階建ての団地の屋上に登り、原発の方向を眺める。街は腐海、ならぬ樹海に没しつつあるように見える

ら若く野心のある人材が集まり、人口は五万人に迫っていた。
そしていよいよ、ツアーのハイライトといふべき原発そのものの見学。外観を眺めるだけではあるが、爆発した四号機、そしてそれを覆うべく建設中の「新石棺」の様子などを、意外なほどの至近距離から見学できた。チェルノブイリでは、原子炉は全面的に停止しているものの、当国の電力系統における重要な送電拠点として現在も稼働しており、新石棺の建設工事も進行中なので、実は案外「活気」がある。



爆発した4号機を、こんなに間近に眺められるとは思わなかった。ソ連が設計開発した黒鉛減速沸騰軽水圧力管型原子炉（RBMK）のRBMK-1000型の原子炉が、人類史上最悪の事故を引き起こした



ただ、4号機の周辺は、さすがに線量が高い。今回のツアーで最高値を記録し、測定器が激しく警報を發した



国際的な支援で建設中の「新石棺」。受注したフランス企業が莫大な利益を挙げている一方、現場のウクライナ人は高線量下で低賃金労働に従事させられているという話を聞いた



ツアーが終わり管理区域から出る際に、一応全身をスキャンして安全を確認。もちろん、全員異常はなかった。最後に、ツアー参加証ももらった

その後、犠牲になった事故処理作業員の記念碑に献花し、チェックポイントで全身をスキャンして異常な被曝がなかったかを確かめ、制限区域の外に出た。近くのカフェで食事を取り（プログラムに含まれているが、食事の味はごく一般的なもの）、ツアーを締め切った。

●参加してみた感想

我々日本国民は、これから何十年も原発事故処理の問題と付き合わなければならぬ。その意味で、四半世紀前に生じたチェルノブ

イリの惨劇から学ぶ点は多く、私自身ツアーに参加して得がたい経験ができた。

私の参加したツアーは、ガイドがロシア語だった。おそらく、外国人向けの英語のツアーも存在するはずである。ただ、可能であれば、日本語のガイドがいてくれたりすると、一般の日本人が参加しやすくなるだろう。日本の旅行会社が企画するウクライナのバックツアーは、歴史とか文化に重点を置いていることと思うが、チェルノブイリをプログラムに組み込んでみたりするのも一案かもしれない。

現状ではチェルノブイリ・ツアーは「学習」

に重きが置かれており、アメニティの要素は乏しい（ゾーン内ではまともなトイレはほぼ存在しないなど）。学習効果を広げるためにも、より広範な市民に参加してもらうことが大事であり、そのためには快適性に配慮することもある必要がある。他方、ツアーでは廃屋に入ったり、瓦礫に触れたりするので、日本人の感覚からいうと、ヘルメットや軍手を着用した方がいいのではないかと感じた。

はっとり みちたか／

一般社団法人ロシアNIS貿易会・ロシアNIS経済研究所 調査部部长。
ロシア・ウクライナ・ベラルーシの経済・政治情勢が専門。個人HPは
<http://www.hattorimichitaka.com/>